1
言　語
言葉の力をつけよう（音読２年①） 〔軍記物語「平家物語」〕
名　前

武士の合戦を題材にして作られた物語のジャンルを「軍記物語」といいます。源氏と平氏の合戦の様子を中心に、平家一族の盛衰を描いた「軍記物語」の代表作『平家物語』は、和文体（日本古来の言葉を使って書く文体）と漢文体（漢文の書き下し文のような文体）を融合した和漢混交文で力強く描かれています。

やってみよう

漢語を多く用いた和漢混交文の独特のリズムを味わいながら音読しよう。

源義経との戦いに敗れた木曾義仲は、共に討ち死にしようと約束していた今井四郎兼平（義仲と主従関係であり、兄弟同然の関係）のもとへ向かいます。しかし、今井は義仲に武士としての誇りを守るために安らかに自害することを勧めました。今井が一人で敵の追撃を防ぐ一方、義仲が乗っていた馬がどろ深い田に入り込み身動きできないでいるところに、敵が迫ってきて、矢を放ちました。

《解説》

木曾殿はただ一騎、粟津の松原へ駆けたまふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷ははったりけり、深田ありとも知らずして、馬をざっとうち入れたれば、馬のかしらも見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てどもはたらかず。今井が行くへのおぼつかなさに、ふりあふぎたまへる内甲を、三浦の石田次郎為久、おっかかってよっ引いてひやうふっと射る。

注1　入相ばかり・・・日没ごろ

注2　深田・・・沼のように泥深い田

《読んだ回数》

1回　2回　3回　4回　5回　何度も　合計　回

朗読　暗唱

1

言語

言葉の力をつけよう（音読2年①）
〔軍記物語「平家物語」〕

名前

解説

★知っておきたい古典の知識

『**平家物語**』の文体は、日本古来の言葉を使って書く和文体と漢文の書き下し文のような漢文体が融合した**和漢混交文**の典型的な名文だと言われています。

この作品は、**琵琶法師**が琵琶に合わせて節をつけて語る、**平曲**として広まっていきました。そのため、冒頭の「**祇園精舎の鐘の声**」の段に見られるように、七五調を基本とした、語りやすい、調子の整った文章となっています。また、琵琶法師により、聞き手の反応をもとにしたアドリブが入ることもあったのでしょう。少しずつ異なる内容の『平家物語』が生まれていきました。

「**軍記物語**」には『**平家物語**』のほかに『**保元物語**』や『**平治物語**』『**太平記**』『**義経記**』などがあります。

身に付けると…

文体の特徴を生かして読み味わうことができます。また、鎌倉時代の文学作品に見られる無常観をを知ることができます。

読んでみよう

《口語訳》

木曾殿はたった一人で馬に乗り、粟津の松原に駆け行かれたが、正月二十一日の日没のころなので、薄く氷が張っていたし、沼のように泥の深い田であることも分からずに、ざっと馬を乗り入れたところ、馬の頭も見えなくなってしまった。あぶみで馬の腹をあおってもあおっても、ムチで打っても打っても馬の身体が動かない。（気があせりながらも、）今井がどうしているのか気がかりで、振り返った木曾殿のかぶとの内側をめがけて、三浦一族の石田次郎為久が、追いついて弓を引き絞り、矢をひょうふっと射た。

《語句の説明》

現代語の「擬音語（音を表現）」「擬態語（様子を表現）」という表現技法を知っていますか。場面にいきいきとした臨場感を与える効果をもっています。

『平家物語』の「扇の的」の話でも、このような表現技法が使われています。「ひやうど放つ」「ひいふつとぞ射切つたる」「さつとぞ散つたりける」などです。

今回、音読した部分にはどんな「擬音語」や「擬態語」が使われていたか分かりますか。

魅力的な文章には、さまざまな表現の工夫や特徴があるのです。

《「平家物語」》

鎌倉初期成立の**軍記物語**。栄華を極めた平氏一族が、源氏に討たれ、没落していく様子を描いています。仏教的思想によって、人間のはかなさと人生の無常さを描き出している作品です。

《「怪談」》

ラフカディオ・ハーンというイギリス人が日本に帰化したのち、執筆した作品です。「雪女」「ろくろ首」などの話が収められている怪奇短編集です。

この作品の中には平家の亡霊が琵琶法師のもとを訪れる「耳なし芳一」の話も収められています。